

Contents

○平成20年度北陸支部大会の概要

[北陸支部大会の報告](#) 遠藤 新

[シンポジウム「近年の北信越地方における地震被害と災害復興」](#) 西村 晋

[「学生による語り合いのシンポジオン」の報告](#) 土田 義郎、 高樫 豊

○支所だより

新潟 [「地域の庭」をめざして -ケアセンター花の里かつぼ-](#) 新海 俊一

富山 [自然環境と建築](#) 堀 祐治

石川 [自然と建築 -地盤災害-](#) 富山 昭宏

長野 [建設会社に入社して感じたこと](#) 遠藤 淳平

福井 [緑と季節感のあるまちづくり](#) 佐々木 教幸

○シリーズ

学生(福井) [福井を照らそう](#) 高橋 さえり

学生(長野) [日本建築学会大会\(中国\)に参加して](#) 久保田 敏史

学生(富山) [樹の家プロジェクトに参加して](#) 加藤 智子

いきいき街づくり(新潟) [ニューカッスルのアートによる都市の再生](#) 赤井 文

かくれた建築(石川) [専長寺山門](#) 山崎 幹泰

○本年度の支部活動について

[支部長になって思うこと](#) 秦 正徳

○奨励研究について

[研究の初心](#) 菅原 邦生

○お知らせ

2008年度北陸支部大会における若手優秀プレゼンテーション賞受賞者が決定いたしました。  
受賞者のリストは[こちら](#)をご覧ください

2008年度北陸支部奨励研究助成対象の選考結果は[こちら](#)をご覧ください。

建築学会北陸支部活動：[「親と子の都市と建築講座」\(新潟\)](#)

日程： 第1回：10月5日(日)、 第2回：11月9日(日)、 第3回：11月30日(日)

詳しくは[こちら](#)をご覧ください。

書籍情報

・[「建築製図」](#)、著者：高永謙・二瓶博厚・遠藤勝勲・坂田充弘・丸谷方正(2008/05発売)

賛助会員を募集しております。詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。



〒920-0863 石川県金沢市玉川町15番1号 パークサイドビル3F  
Tel,Fax:076-220-5566 E-mail:[aij-h@p2222.nsk.ne.jp](mailto:aij-h@p2222.nsk.ne.jp)

(平成20年10月24日発行)

## 北陸支部大会の報告

遠藤 新

(金沢工業大学環境・建築学部建築都市デザイン学科講師、2008年度北陸支部研究委員副委員長)

去る7月26日(土)27日(日)の二日間にわたり金沢工業大学を会場として建築学会北陸支部大会が開催された。

初日は秦支部長の開会挨拶を皮切りに、シンポジウム、北陸建築文化賞表彰式ならびに発表会が行われた。

今年度のシンポジウムは「近年の北信越地方における地震被害と災害復興」をテーマに、中越地震と能登半島地震における被害と復興状況の報告、長岡市山古志地域での自立再建支援に関する報告、中越地震で被害を受けた柏崎市の歴史的建造物の復興状況報告、被災木造建築の耐震改修に関する事例および活動報告、輪島市門前町黒島地区における震災復興の活動報告が行われた。5人の講演者からの白熱した報告は3時間以上に及んだ。

引き続き行われた北陸建築文化賞表彰式では、北日本新聞「創造の森『越中座』」、金沢ライトアッププロジェクト『月見光路』、妙高市立新井南小学校ひまわり保育園、開運堂あづみの菓遊庭の4件が表彰を受けた。続く発表会では4氏による受賞作品およびプロジェクトの概要がパワーポイントによる画像とともに紹介され、会場客は熱心に聞き入った。発表会後には大学内の食堂を会場として、実務者、研究者、学生を交えた立食形式の懇親会が行われ、活発な情報交換が行われるなど賑わいを見せた。

二日目は午前中に研究発表会が、午後からは学生シンポジオンが行われた。

研究発表会では、材料・構造系41題(トピックス・テーマ「地震と建築」の8題を含む)、環境系29題、計画系68題、建築作品5題、合計143題の研究発表と質疑討論が活発に行われた。なお、数年前から研究発表会の会場では満30歳以下の若手研究者等を対象とする「プレゼンテーション賞」の審査が併せて行われている。今年度は66題の発表が審査対象となり、審査委員による審査の結果14題が受賞した。また、建築作品の会場では初日より作品展示(北陸建築文化賞作品、2007年度支部共通事業設計競技優秀作品、北陸支部大学高専卒業設計優秀作品展示)が行われ、北陸支部における設計活動の盛り上がりの一部を垣間見ることが出来た。

学生シンポジオンでは「2008年、この惨憺たるも愛しきまちへ…」というテーマのもとに5つの学生グループ(福井工業大学2グループ、富山大学1グループ、金沢工業大学2グループ)による力が入った口頭発表と討論が行われた。各グループはパネルもしくは模型を持参し、これまでの活動成果報告を行った。参加学生は約90名の4時間以上に及ぶ発表と討論からは、学生のパワーを改めて感じる事ができた。この熱気は来年度にも間違いなく引き継がれていくことであろう。

以上、2日間におよぶ全プログラムは無事終了した。来年度の開催地は富山である。今年度以上の盛り上がり期待される。



写真1 シンポジウム



写真2 学生シンポジオン1



写真3 学生シンポジオン2



## 2008年度日本建築学会北陸支部大会 シンポジウム 「近年の北信越地方における地震被害と災害復興」

西村 晋

(金沢工業大学環境・建築学部建築学科准教授)

北信越地方でこの4年間に大きな被害をもたらした地震が3件発生した。2004年10月23日に新潟県中越地震、2007年3月25日に能登半島地震、2007年7月16日に新潟県中越沖地震である。本シンポジウムでは、被害を受けた建物の復旧、地域の復興に向けて被災者、自治体、建設業団体がどのように取り組んだか、また復旧・復興活動の問題点を5名の講演者が報告し、その活動に関する質疑が行われた。

まず新潟県中越地震と能登半島地震の建物被害調査の結果、復旧状況を金沢工業大学建築系の後藤正美教授から説明がなされた(写真1)。

次に新潟県中越地震で被害が大きかった長岡市山古志地域で自立再建するための支援活動について、アルセッド建築研究所 大倉靖彦氏から報告がなされた(写真2)。被災者が自立再建できるように設計者、施工者、自治体(長岡市)間で実施された住宅供給の協力体制の流れと再生の様子が詳細に報告された。

新潟県中越沖地震で柏崎市の歴史的建造物の復興がどのように進められたかを、新潟工科大学油浅耕三教授より説明がなされた(写真3)。震災から一年が経過した現在、歩道や建物も被災当時のままの箇所も所々に見られ、本格的な復旧活動は始まった段階である。一方で文化財建物は復旧工事の着手も早く、終了しているものもあるという報告であった。

能登半島地震では木造住宅以外に土蔵の被害が多かった。輪島市で被災した土蔵を修復する活動を小林吉則建築計画室 小林吉則氏より報告がなされた(写真4)。土蔵は酒造や輪島塗といった産業に不可欠な道具であるが、被害に対する公的支援は解体撤去のみであった。また大工、左官職人の数も十分ではないという労働力の問題も浮かび上がった。ボランティアによる協力の下で復旧された事例、NPOによる土蔵再生構想、左官技術の伝承を推進する体制も報告された。

同じ輪島市内の門前町黒島地区では、廻船業で栄えた町並みが現存している。能登半島地震で希少な伝統的景観を持つこの地域が大きな被害を受けた。被災状況、復旧への問題点、復興計画を金沢工業大学建築系の中森勉准教授(写真5)から報告がなされた。

以上の講演を終えた後、被災した建物が文化財として扱われる建物とそうでない建物との支援体制の差、被災経験が無い時期に災害時の対応が可能なマニュアルの必要性など、今後復旧・復興体制を具体化していく上で重要な議論が交わされた。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5





## 「学生による語り合いのシンポジオン」の報告

### 2008年度北陸支部大会実行委員会

土田 義郎 (金沢工業大学 環境・建築学部建築都市デザイン学科教授)

高橋 豊 (高山建築・デザイン専門学校)

大会2日目(2008年7月27日(日) 13:00~17:00)に、「2008年、この惨憺たるも愛しきまちへ・・・」というテーマで学生たちが取り組んでいるプロジェクトの紹介と相互理解を企図したシンポジオンが開催された。参加者は54名(学生39名、一般[教員]15名)と盛況であった。

最初に参加5チームから各プロジェクトの概要を説明してもらい、その後フリータイムとして討議のための時間をとった。フリータイムには各プロジェクトごとにコアタイムを設け少なくとも15分間は応答に当たるようにしてもらった。実際は意見交換が弾んでそれよりも長く応対していたと思われる。互いの街づくりにかかわるプロジェクトをじっくり時間を取って様々な視点のもとで議論し、多様な視点を共有できた。学生たちは大いに刺激を受けたようである。若者らしい大胆で自由な発想の場として、継続できることを期待している。

#### [1]プロジェクトい〜ざあ ～耐震改修デザイン都市計画～

発表：福井工業大学 建設工学科建築学専攻4年 八田有輝(代表)、春日智明、小山篤史、園田泰弘、東角昂樹、松尾勇介、矢野和彦

アドバイザー教員：永野康行

(写真1)

#### [2]まち、再考 学ぶ・探す・つくる

発表：富山大学 芸術文化学部3年 加藤祐衣(代表)、鈴木雅代、磯部龍、加藤智子、古川光太

アドバイザー教員：貴志雅樹、横山天心

(写真2)

#### [3]小原ECOプロジェクト・古民家修復活動

発表：福井工業大学大学院 修士2年 深澤翔(代表) 平成18年度多米淑人(大学院生)、岡澤雄一、下矢康二、田嶋良一、田口和代、深澤翔(吉田研究室4年)、和田忠明(大学院生)、西一生(4年)、小野優士(3年)、倉島彬(2年) 平成19年度多米淑人、深澤翔(大学院生)、伊賀義晃、柴田直樹、高橋直樹、藤原雄哉、吉田良(吉田研究室4年)、小森星、南直行、堀江章人、堀江邦聡、吉田恭平(4年)、倉島彬、松村浩美(3年)、野中裕介、小南祐樹(2年)

アドバイザー教員：吉田純一

(写真3)

#### [4]新しい住宅のカたち

発表：金沢工業大学 環境・建築学部建築学科3年 石黒功(代表) [3年]小野頼尚利、左橋菜子、鈴木篤志、清野隆、塚畑大樹、野島梓、牧野俊崇、森田雄一郎 [2年]石月亜希子、上出真希、笹野友樹、高橋亘、徳田絢香、中川達心、平野周、宮里宜雅、山木亜紀子 [1年]枝吉祐郎、大村周平、大桃諒介、奥田沙里、木山真理子、宗井貴史、源石和真、小西康司、近藤秀一郎、千田可奈子、宗倉昇大、田中成樹、徳田裕大、成見大介、村山剛史、渡辺哲志、渡辺良典、横間奈菜世、鎌仲諒

アドバイザー教員：下川雄一

(写真4)

#### [5]眺望のよい崖地にたつ住宅 夢考房建築デザインプロジェクト

発表：金沢工業大学 環境・建築学部建築学科2年 山口翔太(代表) 尾崎崇史、小笹裕一郎、古澤潔、村山和聡、山田将史、太田慎一郎 加藤千尋、神田謙匠、武田健太郎、谷田恭平、田淵拓宏、塚本哲史、八木啓太郎 (金沢工業大学環境・建築学部建築学科2・3年 建



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

築・都市デザイン学科2・3年)  
アドバイザー教員：宮下智裕  
(写真5)

フリータイム(写真6)



## 「地域の庭」をめざして － ケアセンター花の里かつぼ －

新海 俊一

(長岡造形大学造形学部建築・環境デザイン学科 准教授)

私が代表を務める長岡造形大学コクーンプロジェクトチームが株式会社ワシツ設計とのJVで設計した「ケアセンター花の里かつぼ」が竣工しました。私たちは本施設の設計と並行して、施主である特別養護老人ホームかつぼ園の中庭を拠点に「地域の庭」づくりを推進する市民活動団体を立ち上げ、活動をサポートしてきました。本施設は、ソフトとしてはこの市民活動を、ハードとしては新施設の庭園、菜園を活用して、園芸文化が根強い長岡市水穴地区に地域住民共有の庭の実現をめざしています。

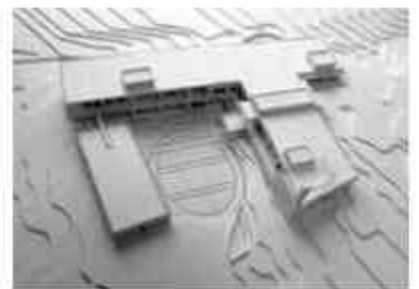
この施設は新潟県長岡市郊外の傾斜地に建つ、ユニットケア方式の認知症高齢者対応グループホームと小規模特別養護老人ホームで構成される高齢者介護施設で、眺望デッキ、地域交流室、園芸室を併設します。遠方に弥彦山を望む立地条件と、地域の園芸文化を活用し、緑豊かな自然環境の中で園芸福祉療法を展開します。入所者と地域住民の園芸を通じた交流が意図され、入所者は地域住民、家族とともに園芸作業に参加したり、四季折々に展開する風景や緑の生育を楽しむことができます。敷地外周に隔壁は無く、文字通り「地域に開かれた庭」となるでしょう。

建物が冬期の雪化粧した山並みの風景に包み込まれていくことを意図し、外観色は白を基調としています。外装色を維持するため、外壁には光触媒のコーティングが施され、付着した汚れは容易に除去できます。

屋内の各ユニットには、敷地周辺に生息する植物をモチーフとするテーマカラーが与えられ、カーテンや屋内のサインボードはこのテーマカラーに準拠しています。入所者が所属するユニットをテーマカラーで識別できるよう工夫されています。

エントランスからロビーラウンジを抜けると正面に眺望デッキがあります。中庭に片持ちで突き出す眺望デッキは、眼下の中庭のみならず、弥彦山をはじめとする遠景への眺望を楽しむための非日常的視点場を提供します。ロビーラウンジや共同生活室の吹き抜け上部にはハイサイドライトを設け、夏はまぶしい陽射しが制限されて涼しく、冬は日光を取り込むことができ明るさと暖かさが得られます。プロジェクト名のコクーンとは、活力が衰えつつある生物を包んで保護し、滋養供給するためのカプセルのようなもの（すなわち繭（まゆ））で、この施設の果たす機能を象徴しています。

この施設で多くの入所者や地域住民が、様々なかたちで生き甲斐を発見できることが期待されます。







## 自然環境と建築

堀 祐治

(富山大学芸術文化学部 准教授)

合掌造りの集落のある五箇山は、省エネルギー基準の区分で言うⅡ地域に相当する寒冷地であり日本有数の積雪地でもある。今年この地において、ヒートポンプを用いた省エネルギー建築の実地試験が行われている。厳しくも豊かな自然があふれる五箇山の気候下で、人が快適に暮らすために必要なエネルギーを僅かながらでも削減せんとしている様は、どことなく滑らかなものを感じずにはいられない。

建物の形成に地域の気候風土、文化、社会環境が関与していることは記するまでもないが、特に地域の自然は、建物の素材や形、さらには街や都市の形成へと深く関わっている。建物が過酷な自然環境の中で人々の営みを可能ならしめるために築かれてきた事を鑑みれば、これは至極当然のことであり、築かれた建物、街並みの形は必然的に生じたものと見ることも出来、地域の建築の特色は先人に培われた「地域の自然に適した形」であるとも言える。

しかしながら、近年の建築ではこの様相に変化が生じてきている。快適な空間を求めてきた我々は、化石燃料を消費し、建築技術、工業技術を発展させ続けてきたが、この技術の向上とエネルギーの消費は、快適な空間の実現と共に建築に意匠的自由をももたらしてきた。先の五箇山においても、特に合掌造りのような形状に習わずとも、冬凍えることなく、積雪に倒壊することのない空間を作り出すことを可能としてきた。言うなれば、今日の建築設備、構造の技術を用いることで、これまで培われてきた寒冷地域、豪雪地帯における建築手法に、それほど重きを置く必要が無くなったと言える。

五箇山に限らず、今日の建物や街並みからは、地域性、すなわち自然環境との繋がりを見いだすことが困難になってきている。これは、数億年をかけて貯えられた化石エネルギーという貯蓄を自由に使うことが可能となった現代の、特殊な建築の時代であるとも捉えることが出来るが、この方向性に持続性の無いことは明白であり、エネルギー問題、地球温暖化問題に直面した今日、今一度、自然環境における建築のあり方について問いかける必要がある。

けっしてエネルギーの消費を前提とした建物を否定し、自然との共生を第一と考えるわけではない。しかしながら、地球温暖化や化石燃料の枯渇といった避けることの出来ない問題を目前に、生活水準の向上、建物や都市の景観、芸術性などの相反する目的に対し、我々建物の使用者は、自然の中で生活することと建物の意味を再認識し、そのスタンスを明確するよう、建築のあり方について再考すべきではないだろうか。



## 「自然と建築 – 地盤災害 –」

富山 昭宏

(金沢工業大学環境・建築学部建築系)

自然を求めて郊外に家を建てました。家を建てた当時は周りに家は少なく、自然も豊かでしたが、今は家に囲まれて街の中とあまり変わりません。ということで、写真-1、写真-2のようになりました。しかし、傾斜地なので景色は最高です。というロケーションですが、自然災害に対してはどうでしょうか。

写真-1の住宅団地の近くに森本断層があります。写真-2の近くには富樫断層があると言われています。金沢市防災会議編「金沢市地域防災計画震災対策編」(平成10年5月に確定し、平成18年5月に見直しされた)によると、森本・富樫断層帯が活動すると、マグニチュードM7.2の地震が発生し、断層を挟んで金沢市の南北の広い範囲に震度6強の揺れが起こると推定されている。

写真-1、写真-2のような傾斜地が震度6強の揺れを経験するとどうなるかは、平成16年10月23日に起こった新潟県中越地震の被害が参考になる。写真-3は新潟県中越地震によって自然豊かな斜面に建つ住宅の前面道路が谷側にすべり、住宅も谷側に傾斜してしまったものである。新潟県中越地域の地盤は、比較的新しい時代の地層が堆積しており、特に丘陵地帯は地すべり地帯として有名である。そこに地震直前に台風23号による降雨という悪条件が重なった。その結果、丘陵部の谷埋め盛土が斜面崩壊して、写真-3のような被害が多発したのである。このような地盤災害は特殊なケースかということ、そうではない。谷埋め盛土の被害は、昭和53年の宮城県沖地震で階段状の谷埋め盛土が住宅ごと谷側にすべり落ちる被害があったからしばしば指摘されている被害パターンである。

それでは、谷埋め盛土は避けて、急斜面の造成地も避けたので安心。と思ったら、緩斜面でもすべるといっている人がいる。京都大学防災研究所斜面災害研究センター佐々恭二教授は、緩斜面中のある土層が地震の揺れで液状化現象を起こして、液状化層から上の層が秒速数メートル以上の速度ですべりおちる高速地すべり現象を指摘している。(ニュートンムック想定される日本の大地震：p52～p53、2006、1、31)

ではどうするか。写真-4の急斜面は、山の一部を削り、その前面を平らに整地したものである。さすがにこの斜面の下には建物は立っていない。この山の裏は、写真-5のように墓地として利用されている。墓地ならば災害にあっても、建て直せばよい。そこで景色のいい斜面の上・下はご先祖様に譲って、災害時には身代わりになってもらって、我々は斜面からは離れて、「災害は忘れて」(この言葉は、鳥海勲著「災害の科学」：森北出版、よりいただきました)暮らそうという平凡な結論になりました。



写真-1



写真-2



写真-3



写真-4



写真-5





## 建設会社に入社して感じたこと

遠藤淳平

(北野建設株式会社)

私は4月から社会人の仲間入りをして、現在施工管理をしています。4月から着しく生活リズムは変わったのですが内面的には実際まだ当時のままでいるような気がしています。学生から変化したこととして規則正しい生活、お金を稼ぐこと、年齢層の違い、仕事の責任感等、就職前から予想はできていたもの様々な変化に合わせることで必至でした。あっという間に半年が過ぎたのですがその中で非常に考えさせられたことがありました。新人としては当たり前かもしれませんが気を利かすということです。気を利かすためには何か変化に気づかなければならない。そしてどのように対応すれば良いか考え、答えを出さなければなりません。自分の勤めている建築現場では日々変化する現場を把握することが必要であり、把握しなければ行動に移せないことから深く理解まではしなくても、問題の重大さは関係なく、小さなことでも新人のわかる範囲で[気付くこと]が求められていると感じました。今まで学生の時は課題を出されてそれに対しての答えを出したり、設計では自分の自由な発想をどのように表現するかなどを考えてきたのですが現在では答えを出す前に問題点を探す、というよりは自然に感じることの必要性を教わり、実際に現場で仕事をすると改めて必要さを知りました。知識の無い自分にとっては各業者の活動内容や現場を把握することが先決だと思い毎日幅広い視野で見れるよう努力しています。経験の差はもちろんあると思いますが現場での働がさえしていれば対処法のひらめきの早さや気付くことで自分自身の学べる量も違ってくるので漠然と眺めていることが多かったのですが考えて物事を見るようになってきました。さらにはその問題に対しての適確な判断が求められ、把握力と判断力が必要な職種であると先輩方々を見て経験が少ないながらも感じ、非常に難しく思いながら将来現場を管理できるのか不安もあります。管理人の立場としては様々な業種に触れることができ、さらに新人は現場での仕事が主なため、この立場を利用してまず覚えるために職人さんとのコミュニケーションをとり実際に体験することが必要だと思うので施工の仕方、工具の使い方等吸収して知識を増やそうと思います。それと同時にとりあえず自分のできることを探して身につけるよう努めていきます。大学では設計を専攻してきたのですが仕事を通じて建物の出来方を知らなければ図面は描けないものだと思い非常に勉強になりました。

## 緑と季節感のあるまちづくり

佐々木 教幸

((有)庭研ふくい)

### (1) はじめに

私は、寺院の住職と、30年余り造園の仕事に従事しています。また毎月1回、各地の庭園や建築、旧街道などを訪れる見学会を行っています。(写真1)

多くの事例を見て、緑の重要性と、それを活かしたまちづくりの大切さを感じましたので例を挙げて書いてみたいと思います。

### (2) まちの現状

今、緑が消えています。庭は世代が変わって駐車場や増築のために縮小されたりなくなったりしています。まちのシンボルツリーになるような大木も、老化や病虫害で切られたりしています。

建築物は、阪神大震災後、大手住宅メーカーを中心とした四角い建物が、どの地方でも増えています。城下町や街道でも増え、農村では、デザイン性のある福井の伝統的な切妻の家が消えようとしています。(写真2)

まちの季節感も乏しく、福井でも、桜並木は有名ですが、夏から冬にかけて季節を感じるものは少ないように思います。

### (3) 緑の効用

緑には多くの効用がありますが主なものとして3点挙げます。

1. 緑陰による体感温度の低下と、光合成による酸素の供出、これは今日、屋上緑化や壁面緑化で注目されています。
2. 落葉樹の紅葉や、花の咲く草木は季節感を創出し、癒しの空間をつくってくれます。古川町内で見たアサガオはまちの空間を和らげていました。(写真3)
3. 日本文化の代表的表現である茶庭、坪庭などにとっても重要な素材です。徳島県の脇町・吉田家の坪庭で見たシダなどの下草はすばらしい空間を作っていました。(写真4)

### (4) 緑の効用とまちづくり

緑は、坪庭や露地庭のように住宅内で使われて、季節感や美的空間を作り出すものと、地域全体で環境的にも良い緑陰、壁面緑化で景観を作り上げるものがあります。愛知県の足助町のようにモミジでまち全体がおおわれ、季節感を出し、地域経済にも寄与するなど、まちづくりに欠かすことのできないプラス効果があります。福井でも、個人住宅やまち全体で緑の効用を活かしたまちづくりをすすめたいと、現在、身近な所から計画中です。(写真5)



写真1 越前東郷今村家見学



写真2 福井切妻の家



写真3 あさがおのカーテン

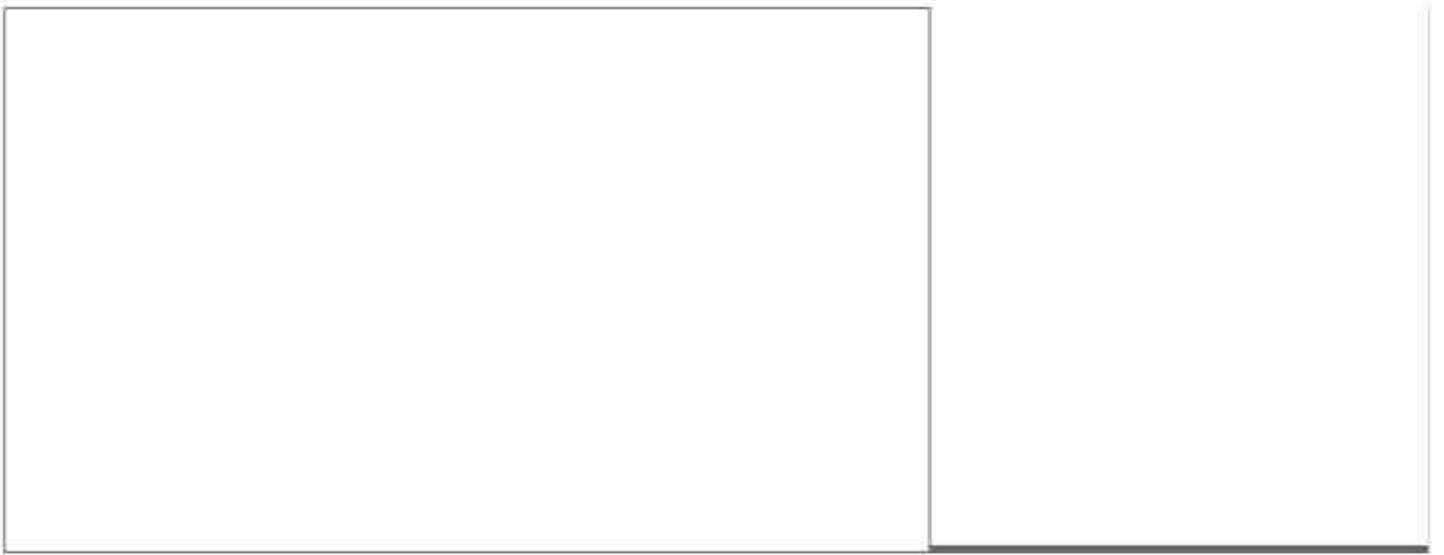


写真4 吉田家坪庭



写真5 小布施のまちづくり





## 福井を照らそう

高橋 さえり

(福井大学大学院工学研究科建築建設工学専攻 光環境研究室(明石研究室)修士1年)

私たち灯りプロジェクトは福井大学の建築学科をはじめとする多様な学科の修士や学部生によって構成された、今年の4月に結成されたばかりのグループです。灯りプロジェクトの目的は、LEDを用いた新しい灯りをつくる技術の開発、照明器具のデザイン、まちづくりへの貢献です。具体的には、今年の12月19日～23日(5日間)に、福井大学近隣の田原町商店街および本学近隣に残る貴重な森林資源である雑木林(ざつぼくりん)でライトアップイルミネーションイベントを行い、田原町「街なか」のにぎわいを創出することを企画しています。これまでの活動内容は、ライトアップの事例調査を行い、私たち学生がどのようなライトアップをしたいか、キーワードとともにイメージ画像を抽出しました。これを用いて、田原町の住民の方と話し合い、ライトアップの方向性を決め、照明器具のサンプルや光のオブジェの模型を作成し、イベントにて住民の方に照明器具のお披露目会を行い、投票も行いました。

このプロジェクトは、福井県が主催する“学生発『街なか』にぎわいプランコンテスト”に応募したところ、優秀賞をいただくことができました。本賞は、学生から福井県内の中心市街地の活性化策を募集し、そのうち優秀な数件(今年は4件)のプロジェクトに対し、それらの実施のための報奨金(30万円)とともに与えられるものです。8月にプレゼンテーションと選考会が開催され、灯りプロジェクトの提案したプラン「ら☆ら☆らいとあつぷ雑木林(ざつぼくりん)@たわらまち」が選ばれました。具体的な企画内容は、ゆらく蠟燭をLEDの制御で実現する最新技術と和紙などの地域の伝統文化とを融合させて灯りを実現するために、本学学生と地域住民が一体となり取り組むものです。

今後は、実際にプロジェクトを実施するために、住民の方にも参加してもらえるように照明器具の作成会を11月30日に催し、それを用いてライトアップを行う予定です。

初年度に、このような素晴らしい賞を受賞でき光栄に思います。受賞に満足することなく、今後もさらに協議を進め、具体的に計画を詰めて冬のライトアップを成功させたいと思います。そして、このライトアップが継承され、さらに田原町から福井市へ、福井県へと光の輪が広がることを期待したいと思います。



地域住民との意見交換会



照明器具サンプル作成



サンプル器具投票会@雑木林



『街なか』にぎわいプランコンテスト





## 日本建築学会大会(中国)に参加して

久保田 敏史

(信州大学工学系研究科社会開発工学専攻 浅野研究室 修士1年)

9月中旬残暑。じりじりと照りつける太陽の下、広島大学東広島キャンパスで日本建築学会大会が開催されました。3日間という長いようでいて短い期間の中で、全国の研究者たちがこれまでの研究成果の発表を行いました。私の発表は3日目の午前、発表者が5人いるセッションの5番目。6分という短い時間の中で研究の要点、結果を簡潔に述べなければなりません。プレゼンテーションでは内容を取捨せず、いかに多くのことを伝えるかという難しさがありました。

私は「寒冷地における住宅用給湯器の効率に関する研究」と題して、住宅用高効率給湯器である、潜熱回収型ガス給湯器とCO2ヒートポンプ給湯機の実測結果に関する報告を行いました。ガスをエネルギー源とする潜熱回収型ガス給湯器と電気をエネルギー源とするCO2ヒートポンプ給湯機を、同一の住宅において切り替えて運転し、双方の1次エネルギー消費量、効率、CO2排出量を比較するといった内容です。北陸支部大会及び全国大会を通して、多くの方々から研究内容に対する貴重なご意見・ご指摘を頂き、自分の未熟さを実感しました。そしてこれらは、これまでの反省と今後研究を進めていく上で新たな知恵となり励みとなりました。私は、研究発表会に参加することの最大の魅力は、研究者の方々の生の声を聞けるということだと思います。今回全国大会に参加し、発表・討論を通して専門家の方々がどのように考えているのか、現在の時勢、今問題となっていることなど、多くの知識・情報を得ることができ、私にとって絶好の勉強の機会となりました。

ところで、今回初めて広島を訪れたわけですが、せっかくなので少し観光をしてきました。広島市に着いたのがちょうどお昼時だったので、まずはお好み焼きを食べました。駅ビル2階、待ち時間20分ほどの行列に並び、注文はお好み焼きスペシャル1200円。広島風は、薄い生地の上にキャベツ・もやしをたっぷりのせて焼き、最後に卵をかぶせるという作り方で、なじみのないものでしたが非常に美味しかったです。

さて、お腹も一杯になったところでいざ広島市街へ。日本最大の路面電車の路線網と収益を誇るという路面電車の街。3800系の電車で揺られながら広島平和記念公園に到着。原爆ドーム、広島平和記念資料館を見学しました。瓦礫にまみれた原爆ドームは、原子爆弾が本当に広島に落ちたのだという現実感を与えました。広島平和記念資料館では、被爆前後の広島の歴史や、原爆投下に伴う放射線、高熱火災、爆風、熱線などによる被害の様子が展示されており、紙面上でしか知らなかった原爆投下という現象をより現実のものとして理解することができました。

研究発表会への参加は自分の研究をステップアップさせる上で有効であり、観光という楽しみもあります。私は、今後も機会があったらどんどん参加していきたいと考えています。





## 樹の家プロジェクトに参加して

加藤 智子

(富山大学芸術文化学部造形建築科学コース2年生)

この夏、私は何にも代えがたい貴重な経験をしました。

富山大学人間発達科学部付属幼稚園は今年度創立120周年を迎えます。これを記念して、園庭に遊具を設置したいとの依頼を受け、丸谷教授率いる学生6人で樹木の間スペースに「樹の家」を建てることになったのです。

8月初旬、実際に幼稚園へ行き園庭の実測をすることから始まりました。園児とのふれあいや、人間発達科学部の学生とのディスカッション、PTAの方、幼稚園の先生方からも意見を頂き設計を進めていきました。ここでポイントとなったのが、遊具としての安全性と遊び方を制限しないことです。安全性という面では、子供がジャンプしても危険でない高さ、下に落ちないために必要な壁の高さ、指を挟まない隙間の大きさなどの数値決めに悩みました。そして、最終案「迷キューブ」の誕生です。どこが入り口でどこが出口が分からない・ぐるぐる回ってしまうという意味の「迷宮」と、デザインの要となっている「キューブ」を掛けて名づけました。コンセプトは「シンプル&フリー」。この家は内外合わせて8つのBOXからできており、大きいものから1650、900、750、600、450、300と、すべて150のグリッドで構成することでまとまりのよいデザインにしました。また、様々な大きさのキューブを配置することで「のぼる」「のる」「おりる」「とぶ」「かくれる」「みわたす」「まわる」などの要素を生み出しつつも、遊び方は定義していないので、子供たちが自由に遊び方を見つけられます。「迷キューブ」は、森にある隠れ家をイメージしたアスレチックハウスです。

9月、自分たちでつくった図面・材料表・工程表をもとに、床・壁・構造の3班に分かれて作業開始しました。床は能登産のあて材を、その他は富山県産のスギ材を使用し、皮が付いた状態からの木取り、木の狂いや割れにも苦しめられました。基礎工事では人力でコンクリートを混ぜ、縄簾(じょれん)という道具の使いやすさに感心しつつも、ワーカビリティをよくしたいと思ってしまう職人さんたちの気持ちを痛感しました。現場には事件が付きものです。そんなとき、いかに迅速に適切な対応ができるかが重要だということも学びました。

今回のプロジェクトでは、実際にクライアントがいて、お金が動き、納期がある、自分たちの手で作ったもので子供たちが遊ぶという責任感と不安がいつもの設計とは大きく異なりました。夏休みの大部分の時間と体力を費やした「樹の家」ですが、その分完成したときの達成感も大きかったです。そして、あの子供たちの笑顔と歓声、忘れません。

今回このような機会を与えてくださった幼稚園の方々、熱心にご指導してくださった丸谷先生には心より感謝しています。経験は力だと信じています。これで満足せず、これからも積極的に活動していきたいです。







## ニューカッスルのアートによる都市の再生

赤井 文

(新潟大学大学院自然科学研究科環境共生科学専攻 岩佐研究室 修士1年)

この夏、ニューカッスルで行われた『ピクノポリス』に参加してきました。

ニューカッスルはイングランド北部にある人口40万ほどの小さな街で、川幅が約1/4マイルのタイン川を隔てて、ゲイツヘッドと双子都市を形成しています。他のイギリスの都市と同様、工業の急激な衰退により錆びれた街になっていましたが、この10年ほどで芸術・文化を軸とした都市の再生が行われています。

タイン川には産業技術を駆使した6つの橋があり、ゲイツヘッド側にはコンサートホール<Sage>と製粉工場の貯蔵庫をリノベーションした芸術文化センター<BALTIC>が、ニューカッスル側にはタイン川に面したテナントの再開発が行われ、その施設群を結ぶように新たに歩道橋の<ミレニアム・ブリッジ>が架けられました。

これらの芸術・文化施設を中心に毎年アートプロジェクトが行われ、今年には日本から東京ピクニッククラブが『PICNIC RIGHT』を掲げワークショップを行いました。芝生とくつろげる場所があり、簡単な料理を各々が持ち寄ることでピクニックをすることができます。ピクニックに訪れた人々に、日常では気付かない都市の魅力を再発見してもらい、公共空間のあり方そのものについて考えてもらうことを目的として行われました。

開催中は「Mother Plane」が<BALTIC>前に設置され、「Baby Plane」がニューカッスルとゲイツヘッドの色々な場所を毎日移動してピクニックが展開されました。「Mother Plane」と「Baby Plane」ともに大盛況。多少の雨が降っても、訪れた人々が「Baby Plane」を使って思い思いに過ごす姿は、まさにアートであり、スーラの「グランジャット島の休日」を思い出す光景でした。

ヨーロッパでは屋外で何かを行う文化が根付いています。日本でもアートを通じたまちづくりや公共空間の提供は、多く見られるようになってきました。しかし、立ち入り禁止の芝生でピクニックができなかったり、高層ビルを建てるために極小の公開空地を設けるといような、公共空間の提供の仕方に問題があように感じます。その中で『PICNIC RIGHT』を唱う東京ピクニッククラブの活動は、これからの日本における公共空間のあり方そのものに影響を与える活動なのではないでしょうか。

詳細は東京ピクニッククラブwebサイト (<http://www.picnicclub.org/>) をご参照ください。



写真1 ミレニアム・ブリッジと  
BALTIC



写真2 Grass on Vacation



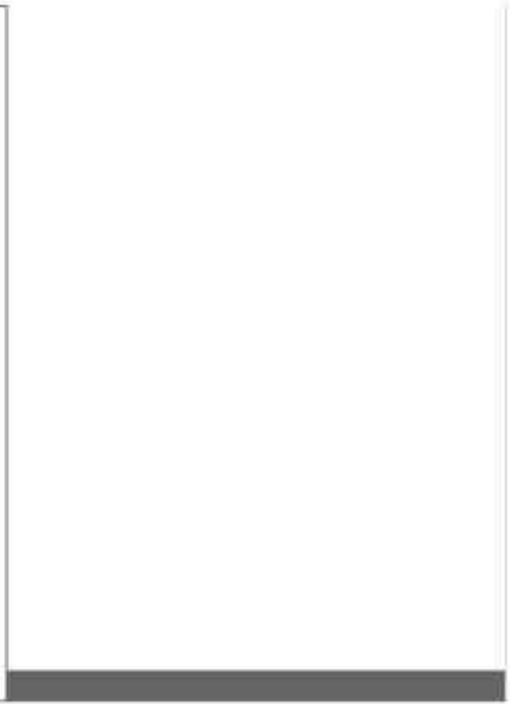
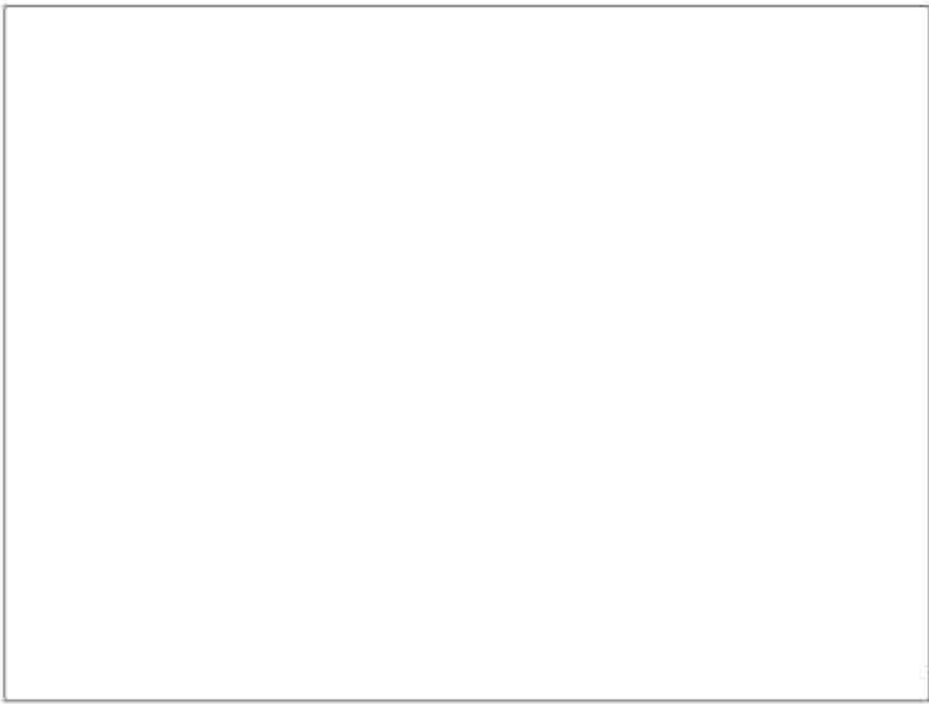
写真3 Baby PlaneとCloud Camera



写真4 ピクニックコンテスト



写真5 BALTICからMother Planeと  
タイン川を望む



## 専長寺山門

山崎 幹泰

(金沢工業大学環境・建築学部建築都市デザイン学科 准教授)



専長寺山門正面

松菊山専長寺は金沢市の北西の港町金石に位置する、真宗大谷派の寺院である。開創は寛正6年(1465)と古く、現在は寛政9(1797)年建立の本堂を始め、庫裏、山門、鐘楼、茶室などを構えている。この中から今回、極めて特異な意匠を持つ山門を紹介したい。

山門は境内正面をおよそ東西に通る、細い街路に面して建っている。軸部は一間一戸控柱付きの棟門の形式で、屋根は側面に唐破風を持つ平唐門としてゐる。正面向かって右手に潜戸付きの板塀が接続し、その先と門左手には腰石積みの築地塀が続く。屋根は、門塀ともに赤褐色の棧瓦を葺いている。

その特徴としては、本柱間に対し屋根の規模が比較的大きいことが挙げられる。二手先として男梁を前後に長く伸ばし、また挿肘木を対角線上にさし、男梁を本柱の外側に持ち出すことで、前後左右ともに深い軒を生み出している。しかし、詰組の間に琵琶板を入れず開放していることと、冠木に太い丸材を用いて木口を破風近くまで延ばす特異な意匠が功を奏し、深い軒にもかかわらず軽快な印象を受ける。

一方で彫刻装飾は控えめである。大虹梁の見付部分には絵様を施さず、木鼻もシンプルなものである。ただし、組物の拳鼻と男梁の絵様が同一のものであり、この絵様の繰り返しは軒下に華やかさを添えている。棧唐戸には大きな牡丹の彫刻が張り付けられている。これは当寺を代表する紋で、本堂内陣の臺股や須弥壇などにも、同じく牡丹の彫刻や飾り金具などを見いだすことができる。また、冠木の木口を覆う入八双金具、本柱足元の根巻金具なども、効果的に用いられている。改造や破損は少なく、保存状態も良好であるが、海からの潮風を受けるため、塩害と思われる木材表面の風化がやや進行している。

建築年代について明確な記録はないが、山門の拳鼻と本堂内組物の拳鼻を比較すると、輪郭、絵様の特徴ともほぼ等しいこと、虹梁木鼻の幅の厚い縁取り状の絵様が本堂向拝の臺股のそれと良く似ていることなどから、本堂と前後して18世紀末に建てられたものと考えられる。

なお、平唐門は主に内裏、門跡寺院や、禅宗寺院の方丈の前などに設けられる門であり、金沢市内ではあまり多く見られない。一般的な平唐門と比較すると、男梁を本柱に挿さず組物で支えること、天井や妻壁を張ること、冠木を太い丸材とすること、などの点に、独自の構造形式が現れていることが分かる。

金沢に数少ない平唐門形式の山門であり、ほかに例を見ない特異な構造形式を、高い完成度でまとめ上げた意欲作と評価できる。



## 支部長になって思うこと

秦 正徳

(富山大学)

編集局から何か所信を書いてみては、という依頼があった。所信の意味を考えると気が重い、短い読みやすい文でいいですよ、と編集諸子に声をかけられたので秋の夕暮れに感じたことを書いている。9月末だが10月中旬の気温である、立山の初冠雪も異例の早さで記録されたい。

過日、本部の理事会で支部長は何をすべきかのレクチャーを受けたのだが、未だに実感が無い。実のところ、支部長が理事会に出席することすら知らなかった。皆さんには申し訳ありませんが、やわやわと進水してみてもちょっと潮が冷たく感じ始めた頃合いです。

先の理事会で公益法人の検討資料にこれまでの建築学会の変遷の概略を書いた資料を頂戴した。建築学会は1941年に創設された。設立当初は学術研究を重んじるいわゆる学会であったようだ。設立後6年たった1947年に日本建築学会と改称され、会員相互の啓蒙というか建築界全体の向上の牽引役を目指す学会に模様替えした。その後、1958年には、建築関係職能団体の組織が整い伸長するに及んで、社団法人日本建築学会の性格が確立された。つまり、会員の研究活動を推進するようになり今日に至っているようである。ここでいう研究は、真理探究の学問としてのものだけではなく、むしろ、日常業務に研究的態度を以て臨まれるすべてが研究である、としているところに共感もてる。このようなことを見聞きして、建築学会は社会にとってどのような存在であるべきかを、今更ながら考え始めている。日常的な探求事の会員相互の交換を進めていくのが学会の原点であったことを知って嬉しく思った。

建築学会の活動が原点から離れることで、社会から見放された、研究者の業績製造システムになってしまっただけでは困る。とはいえ、現実問題の対症療法だけを狙う情報交換だけになってしまうことも避けなくてはならないだろう。なかなか難しい。この学会は、建築に関する学術・技術・芸術の進歩と発展を図るための先に述べた研究を軸として、建築界に携わっている人達の参加できる環境を整えることが肝要だと思う。北陸支部では、シンポジオンを前支部長である桜井先生が始められた。これは、建築学会の原点に沿った一つの方向だと思う。研究的態度を以て社会とのつながりをいかに続けていくかをさらに考えたい。ちょっと功利的だが、つながりを維持するために賛助会員を増やす努力をしてみよう。建築学会への期待が聞こえるかもしれない。



## 研究の初心

菅原 邦生

(上越職業訓練協会・技師/博士)



19年度奨励研究に「日本における雁木通りの残存状態について」をご採用頂き、関係各位の皆様に対しまして、心よりお礼申しあげます。この研究は日本の民家・町並みの代表的な特徴である雁木通りについて、その全国的な残存状態を明らかにしようとするものです。雁木通りの全国的な分布調査は、1966～85年に氏家武博士が実施した広範な現地調査（『雁木通りの地理学的研究』古今書院、1998参照）により、北は青森から南は鳥取まで雁木通りの分布や関係市街地における雁木通りの延長などが明らかにされています。しかし氏家博士の調査からすでに四半世紀近くが経過し、その残存状態も大きく変化しているものと考えられます。

そこで本研究は、防雪通路である雁木通りの全国的な分布や関係市街地における延長距離など現状把握を第1の目的とし、アーケード化した部分や消滅した部分をも調査して、雪国の雁木通りにおける町並変容の全体像を捉えることを意図しています。

この研究を始めた最大の動機は、私が雁木通りの町として知られる上越市高田の出身だからです。本格的な研究は日本工業大学建築学科（埼玉県宮代町）の卒論以来ですが、不思議なことに興味がつきず、大学院修士・博士後期課程と建築史の視点から研究を進め、このテーマで博士（工学）の学位を得られたのは幸運でした。その後地元上越市に戻り、職業訓練校に勤めるかたわら研究を続け、その成果は（財）住宅総合研究財団の助成により、拙書『雁木通りの研究』（2007）として刊行しております。

今回、奨励研究にご採用頂いたテーマは、郷里に戻りましたら、ぜひ本格的に取り組んでみたい研究テーマでした。現在は、まだ調査途中ですので、はっきりとしたことは申し上げられませんが、日本の雁木通りの多くがこの四半世紀に急速な勢いで衰退・消滅していたことが次第に判りつつあります。

雁木通りは雪国を代表する都市景観ですが、所有者の方をはじめ多くの方々のご協力がなければ、保全することが難しいのが現状です。そうした状況の中でこの研究が、雁木や雁木通りの町並みを愛する方々の、新たな研究や景観保全の契機となれば望外の喜びです。報告は来年度を予定しております。ぜひ会場まで足をお運び頂ければ幸いです。